

令和元年6月17日現在

機関番号：82620

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H05379

研究課題名(和文) 染織技術の伝承に関する研究-材料・道具に焦点をあてて-

研究課題名(英文) Study on the Transmission of Textile Techniques, with Focus on Materials and Tools

研究代表者

菊池 理予 (KIKUCHI, RIYO)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化遺産部・主任研究員

研究者番号：40439162

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は中世以降、日本各地に見られる染織技術がどのような伝播経路を辿り、それぞれの産地にもたらされたのか、そして産地に根付いた技法はいかなる材料や道具が用いられてきたのか、工程はどのように分業され、継承されていったのかに着目し研究を行った。実地調査では、技術と材料、道具の関わりについて考察を行った。材料は滋賀県草津市の青花紙製作技術、道具は苧麻等の靱皮繊維による製作技術、絹糸の繰糸技術を対象とした。また、都道府県史(262冊)から染織関連項目の抽出を行い、特に技術交流の項目について整理を進めた。今後も、当該地域によって担っていた職掌なども考慮しながら残された課題を検討していきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は染織技術と材料・道具の関わりに注目した。

染織技術者への調査では、材料の製作技術や道具の利用方法にも注目し、可能な限り映像を用いての記録を行った。これらの調査データは現在の記録として技術の変遷を後世に比較できるように心がけた。また、都道府県史(262冊)より染織関連項目を抽出し、記述内容を整理を行うことで、これまで検討が難しかった国内の各地域同士の影響、技術交流を考察することが可能となった。これらの成果は、今後の染織史研究に貢献できるといえる。

研究成果の概要(英文)：Focus was placed on the following points in this study.-What was the means of transmission by which textile technology found in Japan introduced into their respective areas after the medieval time.-What materials and tools were used for each technology that took root in the respective area.-How was the process divided and transmitted.In the on-site investigation, the relation among technique, materials and tools were considered.The target of the investigation on materials was the technique of aobana-kami manufacture in Kusatsu city, Shiga prefecture. The target of the investigation on tools was on the manufacture of bast fibers (ramie, etc), how silk thread is made. The investigation of documents was done by selecting related items from the history of the entire nation (262 books) and targeting especially on the exchange of techniques.In the future, other questions such as those related with the division of labor and the role played by each group will be taken into consideration.

研究分野：工芸技術

キーワード：無形文化財 染織技術

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまでの染織史研究は作品を中心として、その伝来や施された技法の解明、意匠による文化史的意義を検討することに主眼が置かれてきた(註1)。また、染織史を考察する上では、実物資料はもちろんのこと、それを裏付ける資料として絵画資料を用いた研究も多くなされてきた。絵画資料は、染織史を補完する形で用いられ、風俗画や肉筆浮世絵等に描かれた染織品の意匠や形状については特に関心が注がれてきた(註2)。あわせて、技法書等を用いた復元の試みも近年行われてきている(註3)。しかしながら、染織史研究そのものを概観してみるならば、「有形」文化財に重きを置いた研究が主流であった。有形である作品からは作品に施された「技法(技術の工程)」に関する情報の一端を得ることができる。しかし、作品を真に理解するためには、「無形」的観点である材料や道具、実際の「(技法を施す)技術」にまで目を向けるべきではないだろうか。もちろん、先学においても各染織技術については言及されてきた。しかし、それらを総体的に捉えたものは見られず、各技法、あるいは地域のような一定の縛りより脱していないのが現状といえる。本研究に先立ち、申請者は科学研究費補助金若手研究(B)「染織技法の分業化の展開に関する基礎的研究 技法書・絵画資料・実作品の分析を通して」(H21年度採択、H25年度終了)を通じて、鎌倉時代以降の文献資料・絵画資料・実物資料に見られる染織技法や、技術の担い手、用いられた道具等に関する情報を整理してきた。

この研究で明らかとなったのは、染織技法の工程が非常に複雑であること、特に工程の分業は各技法や地域によって多様であるということである。それは一方で産地や技法により材料や道具が異なることが大いに関わると考えられる。各地域における材料や道具の選択には様々な要因があり、それが残されてきた作品などにも色濃く反映されていると考えられる。しかしながら、そのことについては未だ情報が整理されているとは言えない。

【註】

註1: 山辺知行等『日本の染織』、全9巻、中央公論社、1983年

註2: 長崎巖『小袖からきものへ』、日本の美術 No.435、2002年

註3: 河上繁樹研究代表「江戸時代の小袖に関する復元的研究」平成15年度選定「私立大学学術研究高度化推進事業」(産学連携研究推進事業)

2. 研究の目的

本研究は染織品の様式変遷や模様の流行に関する従来の染織史研究を踏まえ、中世以降、日本各地に見られる染織技術がどのような伝播経路を辿りそれぞれの産地にもたらされたのか、そして産地に根付いた技法はいかなる材料や道具が用いられてきたのか、工程はどのように分業され継承されていったのかに着目し研究を行うものである。本研究では特に染織技術をとリまく材料や道具に着目し、産地間の比較検討や交流の情報を整理することで、染織技術の伝承について検証する。

3. 研究の方法

本研究は文献調査と現地調査を中心に推進した。現在、我が国に伝承されている染織技術は文化財保護法の無形文化財として、伝統的工芸品産業の振興に関する法律(伝産法)の伝統的工芸品としても保護されている。これらは、毎年、指定・解除があるため日々情報を収集して蓄積する必要がある。本研究ではこれらの指定情報の整理を行いつつ、文献調査と現地調査を推進した。

文献調査では、各技術を全国的に俯瞰的な視野で考察できるよう、都道府県史(262冊)から染織関連項目の抽出を行った。抽出した記述は、技術伝播や流通の基礎情報となることを考慮し、記載された染織技術の生産目的が換金物であるのか、実用品であるのか、または藩などの保護を受けた特産物であるのか、記載情報から原材料や製作物(制作物)の入荷・出荷の情報がないか等を留意して抽出をした。特に、職工の招聘、伝説等の技術交流に関する情報については欠落がないよう注意しながら整理を行った。本作業には膨大な作業が想定されたため牛村仁美(東京文化財研究所無形文化遺産部研究補佐員)に加え、染織分野、民俗分野が専門の大学院生や修了生(計8名)の協力を得た。一方、各地の民俗資料館に収蔵されている染織技術関連道具に関しても情報収集を行った。

また、現地調査では、製作地における技術調査及び製作技術者への聞き取り調査を通じて、実際の技術と材料、技術と道具、地域との関りについても考察を行った。現地調査は材料に関しては滋賀県草津市で製作されている友禅染の下絵材料である青花紙の製作技術、道具に関しては苧麻等の靱皮繊維による製作技術、絹糸の繰糸技術を対象とし調査を行った。青花紙製作技術調査には石村智(東京文化財研究所無形文化遺産部音声記録研究室長)、半戸文(東京文化財研究所無形文化遺産部研究補佐員)、苧麻等の靱皮繊維による製作技術には牛村仁美(東京文化財研究所無形文化遺産部研究補佐員)、絹糸の繰糸技術については佐野真規(東京文化財研究所無形文化遺産部アソシエイトフェロー)、橋本かおる(東京文化財研究所無形文化遺産部客員研究員)の協力を得た。

4. 研究成果

本研究の主な成果は(1)日本における染織技法の分布(平成30年度時点)の整理と現地調査、(2)中世以降の日本における染織技法の分布の整理(染織技法書及び藩政史料等)である。

(1) 日本における染織技法の分布(平成30年度時点)の整理と現地調査

平成27~30年にかけて国に保護されている無形文化財及び選定保存技術、伝統的工芸品の情報の整理を行った。染織技法の分布を考える上では、無形文化財の各個認定の場合は個人に属する技術のため、保持団体認定に比べ地域との結びつきが確認しにくいといえる。そのため、今回は、無形文化財と選定保存技術の保持団体認定、伝統的工芸品についての情報について整理を行った。保持団体認定の場合には保護措置が講じられてから現在に至るまで解除がないため、解除の情報を考慮しなくても良いという利点がある。

現地調査では、材料に関しては滋賀県草津市の青花紙製作技術、道具に関しては苧麻等の靱皮繊維による製作技術、絹糸の繰糸技術を対象とし調査を行った。

青花紙製作技術は、これまで我が国において保護対象とはなっていないが、現在でも滋賀県草津市に伝承されている技術である。特に戦後は代替材料である合成青花の普及が進み、伝承している農家も3件となっていた。本研究では、近世の友禅染において青花紙という材料がどのような関わりをもつものであったのかについて文献等から検討し報告した(註4)。さらに、現在の染織技術の中で青花紙がどのように利用されているのかについて、公益社団法人日本工芸会、千總文化研究所、東京藝術大学染織研究室の協力を得てアンケート調査及び聞き取り調査を実施し報告をまとめた(註5)。同報告は、東京文化財研究所と滋賀県草津市と協定を締結して行った青花紙製作技術の記録作成事業報告書『青花紙製作技術に関する共同調査報告書 染織技術を支える草津のわざ』に掲載をした。

また、道具に関する現地調査は靱皮繊維を対象とすることとした。靱皮繊維には大麻、からむし(苧麻)、葛、芭蕉など様々な繊維があり、それぞれが染織技術の原材料として利用されている。植物を収穫し、糸にするまでには各々の工程がある。それらは、絹のように近代以降の量産化の影響をほとんど受けず、現在でも手作業で伝承されてきた技術が多い。そこで、靱皮繊維を対象としてからむし(苧麻)の技術について、国の選定保存技術でもある福島県昭和村の「からむし(苧麻)生産・苧引き技術」、宮古島の苧麻栽培や糸績みの技術の調査を行い報告した(註6)。絹糸製作技術については、岡谷蚕糸博物館の協力を得て9種の異なる道具による繰糸技術の記録作成(動画)を行った。編集作業が終わり次第、これらの動画は岡谷蚕糸博物館の展示に活用される予定である。

一方、これらの現地調査の際には、今後の研究に活かせるよう工程ごとのサンプルを得ることを心がけた。これらの調査研究に使用する機材は、東京文化財研究所保存科学研究センターが所管しており、特にHiROX デジタルマイクロスコープ(本体型番:HiROX RH-8800)は、作品に対して非接触で撮影でき、なおかつ、深度合成が早く撮影計測が円滑、二次元だけでなく三次元の計測もできるため、生地の厚みを数値化することが可能である。さらに動画撮影では、レンズが動くことで作品を3次元から観察できるため、糸の績み目などの観察も可能である。そのため、染織技術のデータをとるには非常に有用な機材といえる。さらに、より精密な調査を行うため、同機材のレンズ(静止画:35~2,500倍 レンズ型番:ACS レボズームレンズ(35-2500x) MXB-2500REZ)を同様の調査を希望する東京文化財研究所内職員の研究費で共同購入した。本調査で得たサンプルは本年度より開始した基盤研究B「絵画に使用された絹・自然布の非破壊分析方法の開発と製法・修復に関する総合的調査」(研究代表者 早川典子)の基礎データとして活用される予定である。

【註】

註4:菊池理予「友禅染と青花紙の関わりに関する一試論」『無形文化遺産研究報告12』、2018年3月)

註5:菊池理予・半戸文「青花紙の染織技術への利用」『青花紙製作技術に関する共同調査報告書 染織技術を支える草津のわざ』pp.79-106、東京文化財研究所2018.10

註6:菊池理予「
」韓国無形文化遺産院図録、2017年8月、菊池理予「東京文化財研究所における染織技術の記録」『日本における染織文化財の保存』研究会、佐賀大学、2017年7月29日

(2) 中世以降の日本における染織技法の分布の整理(染織技法書及び藩政史料等)を行った。

前述のように、申請者は科学研究費補助金若手研究(B)「染織技法の分業化の展開に関する基礎的研究-技法書・絵画資料・実作品の分析を通して」(H21年度採択、H25年度終了)を通じて、室町時代以降の文献資料(227件)に見られる染織技法や、技術の担い手、用いられた道具等に関する情報を整理してきた。その中で、指導を目的として技術者を招く事例等、技術の伝播を考える上でも重要な背景が確認された。そこで、本研究では新たに情報を補完すべく都道府県史を中心に染織技術の関連項目についての情報整理を行った。都道府県史(262冊)から染織関連項目の抽出を行い(5115件)、記述を内容ごとに分類した。特に技術交流の項目については情報の欠落などの見直しを行いながら記述の抽出および整理を進めた。抽出された情報には、江戸時代における岐阜縮緬等の西陣の火災による職員の移転や長井紬のように藩主が特産品となるように職工を招いた事例、明治時代以降の京都府・大阪府ではイギリス・フランスなどの国外ヘジャガード織や綿紡績等を学びに行く事例が見られた。また、山形県や新潟県等の原材料の生産地では、丹後縮緬の生産地へ出荷したというような原材料の出荷先の情報

も多くみられた。一方、諏訪の座繰機は上州より購入した、広瀬絣の高機は久留米に寸法を計測にいき作成したなど道具を介しての技術交流も確認できた。これらの記述は、科学研究費報告書『資料 染織技術の伝承に関する研究 材料・道具に焦点をあてて』（2019年6月）としてまとめて掲載した。これらの情報は膨大であり、情報の精査はまだ不十分な状態である。しかしながら、本研究により抽出された情報は、我が国の染織技術の伝承を考える上では重要な基礎情報である。

今後は、特に近世における専売について当該地域によって担っていた職掌なども考慮しながら残された課題を検討していきたい。江戸時代享保期以降は各藩において専売政策が盛んとなり、多くの染織品に関わる品目が藩の特産物として生産を奨励されている。これらの実態を明らかにするには藩政資料などの地方誌に加え、本研究により全都道府県史から得られた他地域との交流の情報が有用であると考えられる。さらに、各技術を全国的に俯瞰的な視野で考察できるよう、江戸・京都・大阪などの都市で出版された『毛吹草』『京雀』『江戸雀』『女用訓蒙図彙』『羽倉考』『和漢三才図会』『守貞漫稿』等の特産物に関する情報（特に材料や道具に関する記述）との比較、各産地の民俗資料館に所蔵されている道具との因果関係を考察することで、各地域における染織技術の実態、染織技術と材料、道具の関わりの解明を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

菊池理予・半戸文「青花紙の染織技術への利用」『青花紙製作技術に関する共同調査報告書 染織技術を支える草津のわざ』東京文化財研究所、査読なし、2018年10月

菊池理予「友禅染と青花紙の関わりに関する一試論」『無形文化遺産研究報告 12』東京文化財研究所、査読なし、2018年3月

菊池理予「
」韓国無形文化遺産院図録、査読なし、2017年8月

〔学会発表〕(計4件)

菊池理予、太田記念美術館江戸文化講座(連続講座)「現代に生きる江戸のファッション」2018年12月1日、8日、15日

菊池理予「東京文化財研究所における染織技術の記録」『日本における染織文化財の保存』研究会、佐賀大学、2017年7月29日

〔図書〕(計1件)

科学研究費報告書『資料 染織技術の伝承に関する研究 材料・道具に焦点をあてて』2019年6月

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。